

<b>Title</b>	要介護度および施設種別からみた歩行・移動に関する実態とその環境整備に関する基礎的研究：同一地域におけるアンケート調査から
<b>Author</b>	三浦, 研 / 川越, 雅弘 / 孔, 相権
<b>Citation</b>	生活科学研究誌. 6 巻, p.105-112.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	1348-6926
<b>Type</b>	Research Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	『生活科学研究誌』編集委員会

## 要介護度および施設種別からみた歩行・移動に関する実態とその環境整備に関する基礎的研究 —同一地域におけるアンケート調査から—

三浦 研<sup>\*1</sup>, 川越 雅弘<sup>\*2</sup>, 孔 相権<sup>\*1\*3</sup>

<sup>\*1</sup>大阪市立大学大学院生活科学研究科

<sup>\*2</sup>国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部

<sup>\*3</sup>大阪市立大学都市研究プラザ

### Difference between Long-term Care Facilities in the Same Area Focusing on Walking Support Conditions: Analysis of Results of a Questionnaire Survey

Ken MIURA<sup>\*1</sup>, Masahiro KAWAGOE<sup>\*2</sup> and Shoken KOH<sup>\*1\*3</sup>

<sup>\*1</sup>*Graduate School of Human Life Science, Osaka City University*

<sup>\*2</sup>*Department of Empirical Social Security Research,*

*National Institute of Population and Social Security Research*

<sup>\*3</sup>*Urban Research Plaza, Osaka City University*

#### Summary

Questionnaires were sent to long-term care facilities for the elderly in the same area to check out actual care differences focusing on walking support conditions. Conclusions from results obtained are shown. 1) Selection of a walker is linked not only to the ADL of the elderly but also to the floor area of the facility. 2) 80% of transportation by wheelchair is not self-support, as wheelchairs are not used as self-help devices but to deliver older people. 3) Some facilities urge 6-10.4% of the elderly with a little walking ability to take a wheelchair, resulting in anxiety about falling. In such facilities, physical conditions such as wheelchair substitute should be readjusted to bring out the safe and independent walking of the elderly. 4) Based on the analysis of shoe types, using shoes and slippers are related to ADL conditions of the elderly, but selection of "bare feet" and "stocking" are not related to the ADL but to a building's conditions fitting Japanese lifestyle.

**Keywords** : 高齢者施設、ケア環境、車いす、はきもの

*Long-term Care Facilities, Care Environment, Wheelchair, Shoe selection*

#### 1. はじめに

高齢者施設で転倒が恐れられる理由は、転倒→骨折→入院→寝たきりという図式をもたらすからである。高齢期の手術はお年寄りに負担が大きく、入院生活が長期に及ぶと、筋力が衰え、歩けなくなったり、認知症が進むなど、さまざまな弊害を伴う。骨折は直ったものの、病院で全く別人になり施設に戻ってくる、というケースもあり、しばしば転倒リスクを恐れるあまり、歩行可能な高齢者を車いすに乗るよう誘導し、ひどい場合はお年寄りをベッドに縛り付けるなどの身体拘束に発展する。し

かし、歩行は運動機能のなかでも特に日常動作に強く関係する動作であり、「老化は足から」といわれるように、高齢者にとって歩行機能の維持は、自立した日常生活に欠かせない重要事項である。転倒を恐れる余り、自力で歩かないと、脚力が衰え、本当に車いすなしでは生活できなくなってしまう。最後まで自立した生活を送るためにも、お年寄りから自力歩行の機会を取り上げるのではなく、まず転倒しない取組みを含めて検討すべきであり、そのためには、高齢者施設における歩行・移動の実態や課題を足元から詳細に明らかにする必要がある。

わが国の高齢者施設の整備は、1963年の老人福祉法の制定以来、新たな課題に対応すべく、新しい施設種別の枠組みを次々と増やした一方、旧来の施設種別を十分に整理せず残したため、宅老所や小規模多機能ホームのような民家改修の小規模施設から従来型の大規模施設まで、さまざまな高齢者施設が登場しているが、建築計画分野における研究の多くは、移動よりも滞在時の行為や空間の使われ方に着目する研究が主であった(井上1997, 橋1997, 石井1997, 庵1999)。高齢者施設における歩行や移動の実態把握に取り組んだ研究は、人間工学やリハビリ分野を除くと、主に車いすの分野において、調整機能付き車いすの導入が操作性や生活展開に及ぼす効果に関する一連の研究(齋藤ら2000 [a], [b], [c], [d])、移動・乗車能力と認知症度を踏まえた視点から車いすによる生活展開を分析した研究(大塚ら2003,2004)などが主な研究であるが、どのような施設種別において、どのような歩行・移動の特性がみられるのか、歩行から車いすに至る前段階までを含め、要介護度や施設種別を踏まえた実態把握については十分な研究がなされていない。当然、それぞれの施設種別において、利用者のADL等が異なるため、単純な比較は難しく、高齢者の要介護度を考慮すべきである点は言うまでもないが、歩行・移動を支える「はきもの」や、歩行や移動を支持するつえ、歩行器、車いすなどの支持具、空間を含めた建築特性の考察も重要である。言い換えると、空間と支持具の計画が別々の視点から検討されているが、より望ましい歩行や移動を実現するためにも、両者の統合的アプローチが求められている。

そこで、本研究では、高齢者施設の空間と、「はきもの」の選択や、杖・装具、歩行器、車いすなどの支持具、歩行・移動を取り巻く実態や課題について、歩行から車いすに至る前段階までを含め、要介護度や施設種別を踏まえた実態把握を行い、課題を抽出するため、2007年1月に福岡県直轄地区において実施された、異なる施設種別を対象としたアンケート調査をもとに、同一地域内の実態を詳細に調べ、その環境整備に関する基礎的知見を得る

ことを目的とする。

## 2. 研究方法

### 1) 対象施設および方法

ケアの質向上を目指し、福岡県直轄地区2市2町(福岡県直方市、宮若町、鞍手町、小竹町)に所在する高齢者施設が施設種別の垣根を超え結成した「高齢者の「食」と「排泄」に関する」直轄勉強会「への参加施設を対象として、2007年1月調査票を各施設に郵送配布し、施設名を記名のうえ、郵送にて回収を行うアンケート調査を実施した。

### 2) 回収状況

27施設から回答を得たが、無効票を除いた結果、特別養護老人ホーム(以下、特養)6施設、介護老人保健施設(以下、老健)4施設、療養医療施設(以下、療養病床)1施設、グループホーム(以下、GH)10施設、ケアハウス1施設、有料老人ホーム(以下、有料)1施設、宅老所(以下、宅老)1施設の合計24施設から回答を得た(表)。当該市町村の特養、老健、療養病床、GH、ケアハウス、有料の総計が34であることから、24施設からの回答は概ね当該地域の高齢者施設の実態を示すデータといえる。なお、比較的要介護度の有料、ケアハウス、宅老所(各一箇所)については、以下、施設種別の分析においては、「その他」としてまとめ表記する。

### 3) 調査項目および解析方法

本調査では、設定した調査項目は以下の通りである。

- ①施設プロフィール(所在地、施設種別、定員、要介護度者の人数)
- ②歩行・移動に関する項目として、歩行状況(自立歩行)、車いす介助における自立状況、施設内における「はきもの」の使用人数、転倒を危惧した車いすの使用人数)について、24施設、定員914名のアンケート結果について分析を実施した。

【Table.1】 回答施設種別とその定員

	施設数	定員	割合
特養	6	380	41.6%
老健	4	270	29.5%
療養病床	1	30	3.3%
GH	10	144	15.8%
有料老人ホーム	1	48	5.3%
ケアハウス	1	32	3.5%
宅老所	1	10	1.1%
全体(人)	24	914	100.0%

【Table.2】 施設種別ごとの平均要介護度

	自立		経過的要介護		要支援1		要支援2		要介護度1		要介護度2		要介護度3		要介護度4		要介護度5	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
特養	0	0%	0	0%	0	0%	2	1%	21	6%	56	15%	81	21%	113	30%	111	29%
老健	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	57	21%	69	26%	76	28%	45	17%	19	7%
療養病床	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	9	30%	10	33%	4	13%	7	23%
GH	0	0%	0	0%	7	5%	2	1%	40	28%	43	30%	30	21%	14	10%	3	2%
その他 (有料・ケア・宅老)	8	9%	2	2%	7	8%	8	9%	16	18%	13	14%	15	17%	9	10%	5	6%
全体(人)	8	1%	2	0%	14	2%	12	1%	134	15%	190	21%	212	23%	185	20%	145	16%

### 3. 調査結果

#### 1) 調査施設における要介護度

施設ごとの定員と平均要介護度を示した【Table. 2】【Fig. 1】。特養の要介護度が高く、GH、ケアハウスにおいて要介護度が小さいなど、一般的な傾向が当該地域においても確認された。

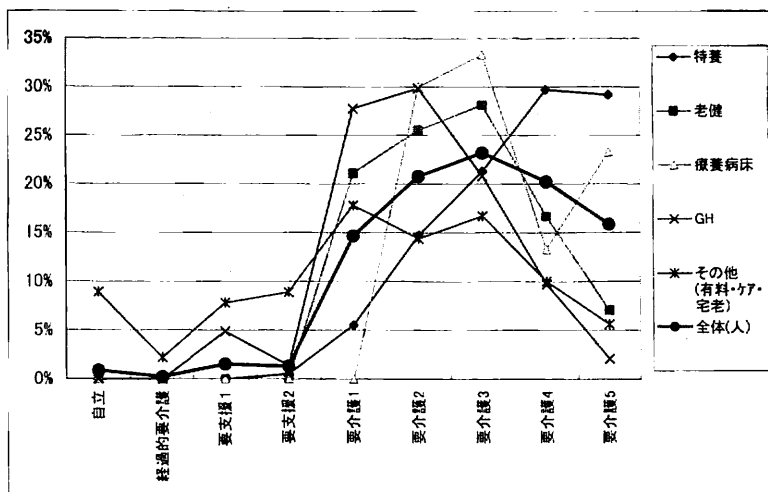
#### 2) 歩行の自立の実態

歩行の実態を施設種別ごとに示すと、特養および老健において車いすの使用割合が7割から8割と高いこと、また、GHでは歩行の自立している利用者割合が相対的に高いが、それでも自立は3割強であり、2割の利用者が車いすを使用する実態など、施設種別ごとの特徴が把握された【Table. 3】【Fig. 2】。

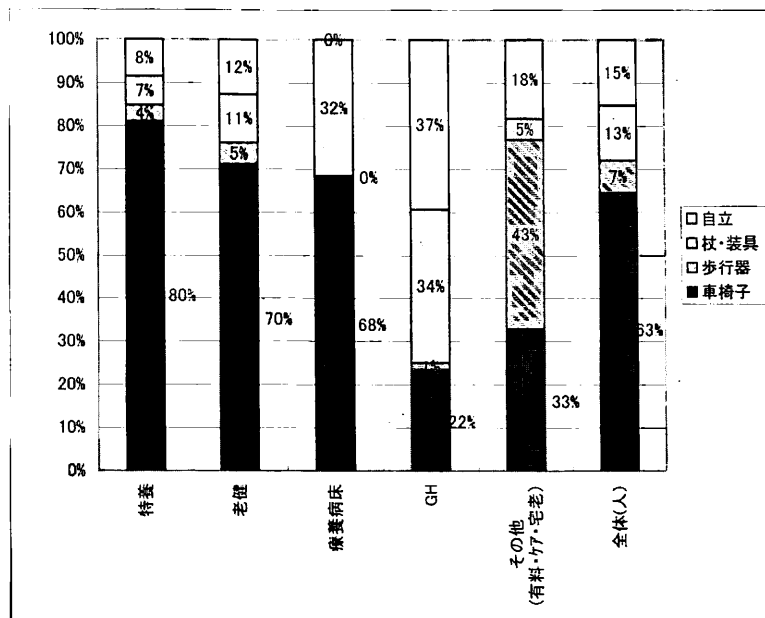
#### 3) 平均要介護度と歩行状況

次に平均要介護度と歩行状況を施設ごとに詳細に検討するため、横軸に平均要介護度を設定し、縦軸に自立歩行率、杖・装具率、歩行器率、車いす率を設けた【Fig. 3～6】

その結果、自立歩行率（自立歩行者数／施設定員）は、ケアハウスを除くと、要介護度が高くなるにつれ低下し、負の相関が示された（相関係数=-0.581）【Fig. 3】。杖・装具率については相関係数が-0.271となり、あまり相関はみられず【Fig. 4】、歩行器率については、相関係数は-0.48であり、一定の相関はみられた【Fig. 5】。なお、要介護度が低く、歩行可能な高齢者数の占める割合の多い施設（GH、ケアハウス、有料）のなかで、歩行器率が高かったのは、施設面積の小さいGHや宅老所ではなく、施設面積の大きいケアハウス、有料であった。こうした点から、歩行器の使用には施設面積の大小が関係していることを示唆する結果であろう。要介護度と車いす率については、相関係数=0.800と極めて高く、重度になると車いす使用率が高くなる、という当然の結果が得られた【Fig. 6】。



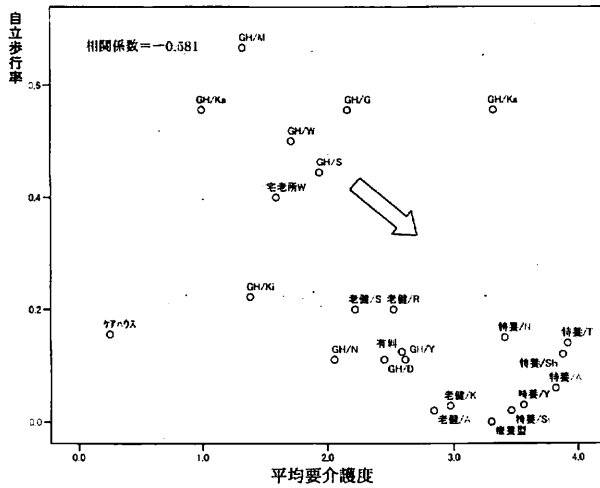
【Fig. 1】施設種別ごとの平均要介護度の分布



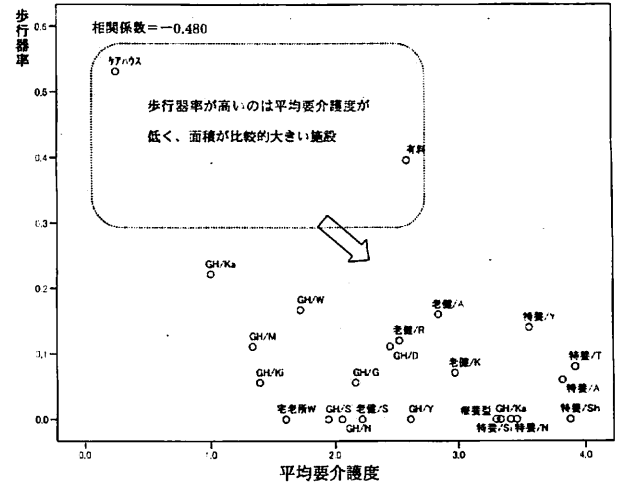
【Fig. 2】施設種別ごとの歩行に関する実態

【Table. 3】施設種別ごとの歩行に関する実態

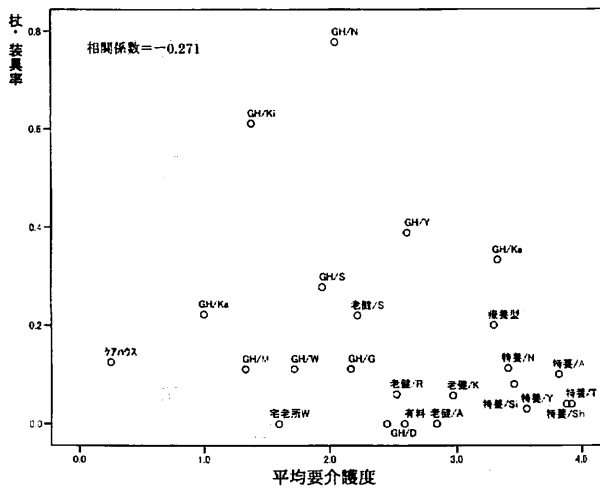
	自立		杖・装具		歩行器		車椅子		その他		合計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
特養	32	8%	25	7%	14	4%	304	80%	6	2%	381
老健	33	12%	29	11%	13	5%	185	70%	6	2%	266
療養病床	0	0%	6	32%	0	0%	13	68%	0	0%	19
GH	52	37%	47	34%	2	1%	31	22%	7	5%	139
その他 (有料・ケア・宅老)	15	18%	4	5%	36	43%	27	33%	1	1%	83
全体(人)	132	15%	111	13%	65	7%	560	63%	20	2%	888



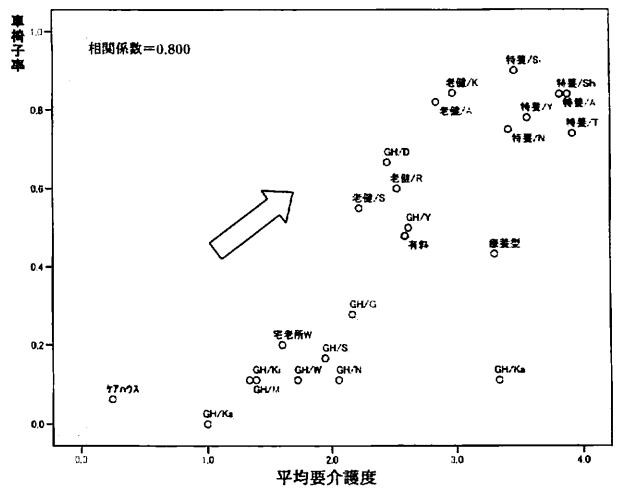
【Fig. 3】 自立歩行率と平均要介護度（施設別）



【Fig. 5】 歩行器率と平均要介護度（施設別）



【Fig. 4】 杖・装具率と平均要介護度（施設別）



【Fig. 6】 車いす率と平均要介護度（施設別）

4) 車いすの使用状況に関する状況

より詳細に車いすの使用状況を考察するため、“移乗”および“自走”が介助または自立か分け、“移乗・自走ともに自立”“移乗-介助・自走-可能”“移乗-自立・自走-介助”“移乗・自走ともに不可”の4段階で集計した【Table. 4】【Fig. 7】。

その結果、車いすの使用状況は、車いすを自助具と

して使いこなす“移乗・自走ともに自立”は、約2割に留まり、高齢者施設における車いすによる移動には、約8割のケースで職員の介助を要する実態が確認された【Fig. 7】。車いす介助の内容については、“自走・移乗ともに不可”が約50%と最も多く、車いすが自助具としての使用よりも職員が高齢者を“運ぶ”ために使われている実態が示された。

【Table. 4】 車いす使用者の移乗・自走の自立状況

	移乗・自走 ともに自立		移乗-介助 自走-自立		移乗-自立 自走-介助		移乗・自走 ともに介助		合計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
特養	39	13%	71	23%	13	4%	181	60%	304
老健	53	29%	59	32%	7	4%	65	35%	184
療養病床	0	0%	0	0%	4	31%	9	69%	13
GH	9	29%	2	6%	4	13%	16	52%	31
その他 (有料・ケア・宅老)	12	44%	5	19%	0	0%	10	37%	27
全体(人)	113	20%	137	25%	28	5%	281	50%	559

“自走・移乗ともに不可”の次に多かったのは“移乗—介助・自走—自立”であり24.5%であった。“移乗—自立・自走—介助”については全体で5%と少なく、車いすを使いこなすうえで、自走よりも移乗が困難とされている実態が示された。

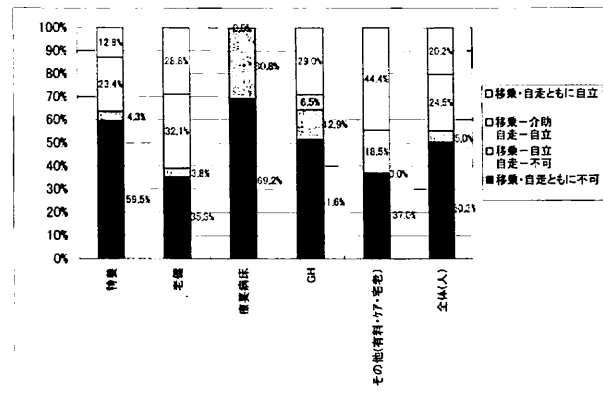
施設種別間で比較すると、特養や療養病床では、“自走・移乗ともに介助”のお年寄りが多いが、老健、GHおよび比較的介護度の低いその他種別“有料、ケアハウス、宅老所”においては、“移乗・自走ともに自立”が車いす使用者の約3割から4割を占めた。“移乗・自走ともに自立”の車いす使用者は、“移乗—介助・自走—可能”の高齢者よりも一般的に歩行能力が高く、こうした高齢者が約3割から4割を占めた、老健、GHおよび比較的介護度の低いその他種別“有料、ケアハウス、宅老所”においては、伝い歩きしやすい環境整備や個々の利用者の身体特性に適合した歩行器の導入により、車いすに頼らない環境整備の必要性が指摘される。

### 5) 転倒・骨折予防の車いす使用に関する状況

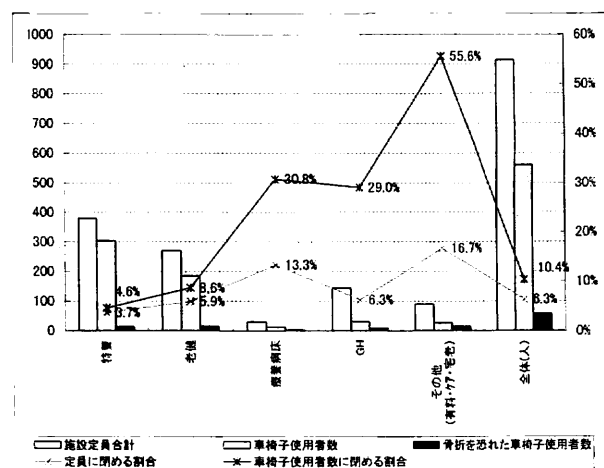
【Fig. 8】は、“転倒や骨折を心配した車いす使用者の数”の結果である。全体で施設定員の6%、また車いす使用者数の10.4%において、“転倒や骨折を心配した車いす使用者の数”が確認された。特に、歩行者の割合が相対的に多いGHにおいて、車いす使用者の約3割、またその他と区分した有料、ケアハウス、宅老所の約半数で、“転倒や骨折を心配した車いす利用者数”が把握された。一地域のデータであるが、歩行可能な高齢者が一定数、骨折や転倒を危惧するあまり、自分の足で歩かず車いすによる移動となっている実態が明らかになった。このことから、衝撃を吸収しやすい床材の導入など、骨折しにくい環境整備が過度の車いす使用を改善するうえで重要だといえる。

### 6) 施設種別ごとの「はきもの」の選択状況

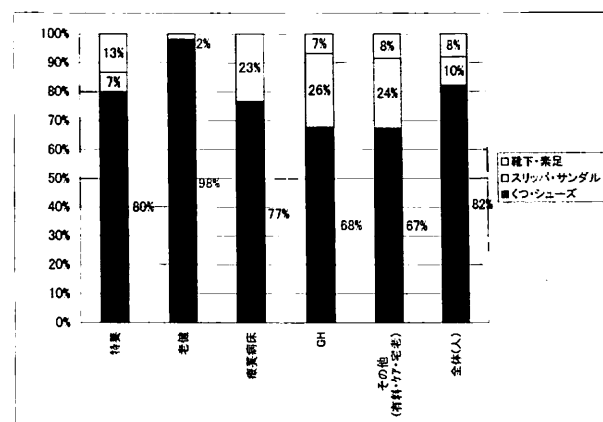
【Fig. 9】は、施設種別ごとにどのような「はきもの」を選択しているのか、“くつ・シューズ”“スリッパ・サンダル”“靴下・素足”ごとの利用者数を集計した結果である。特養、老健、療養病床など重度の高齢者の多い施設では、“くつ・シューズ”が多く、“スリッパ・サンダル”は歩行可能な高齢者の多いGHやその他“有料、ケアハウス、宅老所”に比較のみられるなど、施設種別による違いも確認されたが、全体的な傾向としては、いずれの施設種別においても“くつ・シューズ”全体で約8割と多く、次いで“スリッパ・サンダル”が1割、自宅に近い“靴下・素足”で過ごす施設は、8%と全体で



【Fig. 7】車いす使用者の移乗・自走の自立状況



【Fig. 8】転倒・骨折を危惧した車いす使用者数（施設種別）



【Fig. 9】施設種別ごとの「はきもの」の選択

少数であった。同一地域の調査事例であるが、ほとんどの高齢者施設で“くつ・シューズ”が使用されている実態が明らかになった。

### 7) 要介護度と「はきもの」の選択

次に平均要介護度を横軸に設定し、「はきもの」を縦軸に設定し、「はきもの」の選択率(=該当「はきもの」者数/施設定員)と要介護度の相関を調べた【Fig.10~12】。

その結果、「くつ・シューズ」については、相関係数が0.596となり、施設の平均要介護度が高くなると「くつ・シューズ」を選択する割合が増加する傾向が確認された。逆に「スリッパ・サンダル」については、相関係数が-0.64となり、平均要介護度が高くなると「スリッパ・サンダル」を選択する割合が低下する傾向が強いことが確認された【Fig.10】。

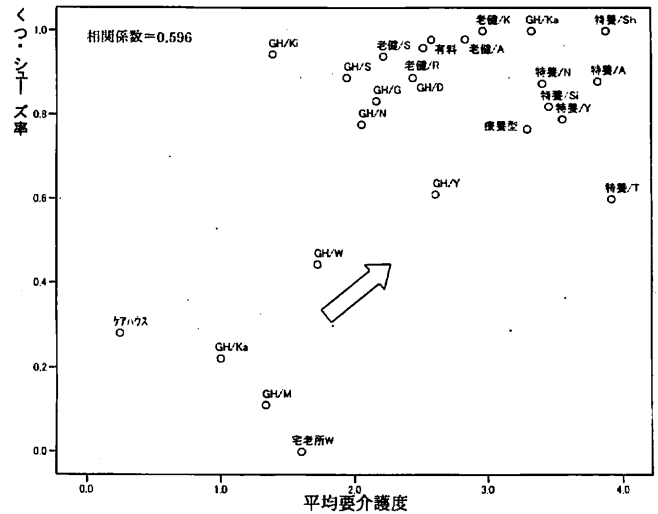
一方、「靴下・素足」についても、平均要介護度との相関係数を求めた結果、0.18となり、両者にはほとんど相関がないことが明らかになった。【Fig.11】をみても、靴下・素足率が突出して高い施設は、宅老所/WとGH/Kaのみであり、その他の施設では、靴下・素足率は、0から0.2以下に集中し、両施設が要介護度によらない分布を示すことが分かる。これは、宅老所/Wが民家を改修した建物を使用していること、また、GH/Kaが自宅に近い環境整備に取り組み、施設床面にタイルカーペットを敷き詰めている、という他の施設にない建築特性に起因した結果と考えられる。いいかえるなら、「靴下・素足」の選択が、要介護度ではなく、むしろ建築特性に起因することが示されたといえる。

一方、【Fig.12】において、平均要介護度が3を超える施設において、靴下・素足率が0.1から0.3に分布し、低い要介護度よりもむしろ高い分布を示している。これは、ほとんどの時間をベッドの上で過ごす「寝たきり」に近い重度の高齢者が、こうした要介護度の高い施設に多く、ベッド上で「靴下・素足」過ごす結果であると考えられる。

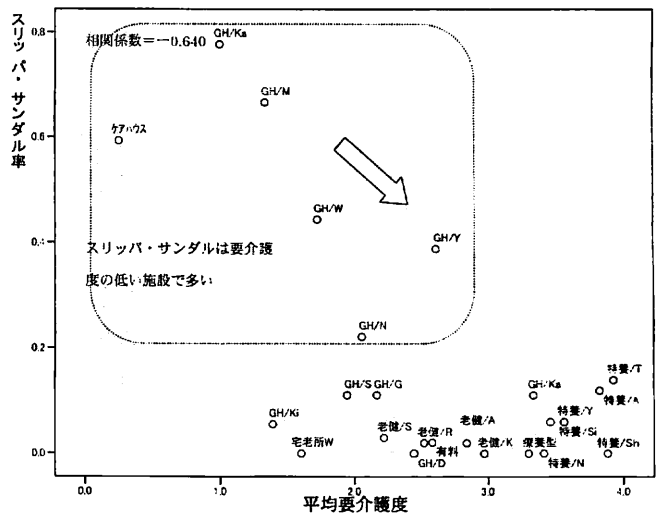
以上から、自宅に近い「素足・靴下」での過ごし方には、重度高齢者の寝たきりに近い状況を除くと、要介護度に影響されるよりもむしろ、建築特性に起因することが、データから示された。

### 4. 結論

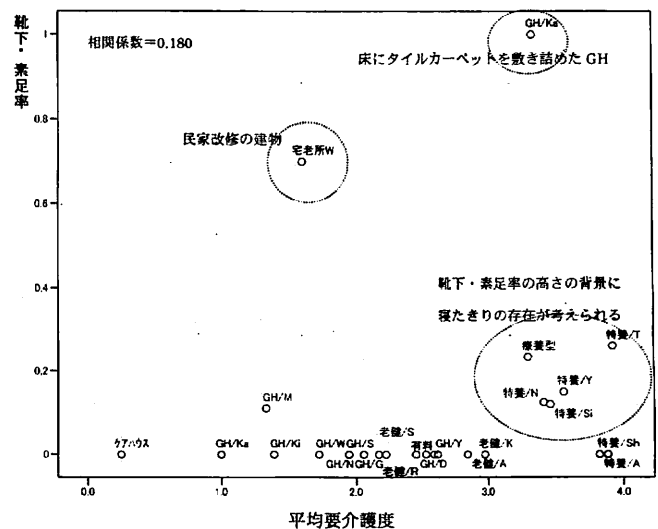
同一地域の高齢者施設にアンケート調査を実施し、要介護度および施設種別からみた歩行・移動に関する実態把握とその環境整備上の課題を明らかにした。本研究の結論は以下の通りである。



【Fig.10】 くつ・シューズ率と平均要介護度 (施設別)



【Fig.11】 スリッパ・サンダル率と平均要介護度 (施設別)



【Fig.12】 靴下・素足率と平均要介護度 (施設別)

1) 要介護度が低く、歩行可能な高齢者数の占める割合の多い施設 (GH、ケアハウス、有料) のなかで、歩行器率が高かったのは、施設面積の小さいGHや宅老所ではなく、施設面積の大きいケアハウス、有料であったことから、歩行器の使用には施設面積の大小が関係していることを指摘した。

2) 車いすの“移乗”および“自走”の自立に着目し、“移乗・自走ともに自立”“移乗—介助・自走—可能”“移乗—自立・自走—介助”“移乗・自走ともに不可”の4段階で集計した結果、車いすの使用状況は、車いすを自助具として使いこなす“移乗・自走ともに自立”は、約2割に留まり、高齢者施設における車いすによる移動には、約8割のケースで職員の介助を要する実態が確認された。また、“自走・移乗ともに介助”が全体の約半数を占め、車いすが自助具としての使用よりも職員が高齢者を“運ぶ”ために使われている実態を把握した。

3) “移乗・自走ともに自立”の車いす使用者は、“移乗—介助・自走—可能”の高齢者よりも一般的に歩行能力が高いと考えられるが、こうした高齢者が約3割から4割を占めた、老健、GHおよび比較的介護度の低い有料、ケアハウス、宅老所においては、伝い歩きしやすい環境整備や個々の利用者の身体特性に適合した歩行器の導入による、車いすに頼らない環境整備の必要性を指摘した。

4) 全体で施設定員の6%、また車いす使用者数の10.4%において、“転倒や骨折を心配した車いす使用者の数”が確認された。特に、歩行者の割合が相対的に多いGHにおいて、車いす使用者の約3割、またその他と区分した有料、ケアハウス、宅老所の約半数で、“転倒や骨折を心配した車いす利用者数”が把握されたことから、衝撃を吸収しやすい床材の導入など、骨折しな

くい環境整備が過度の車いす使用を改善するうえで重要性を指摘した。

5) 施設種別ごとにどのような「はきもの」を選択しているのか、“くつ・シューズ”“スリッパ・サンダル”“靴下・素足”ごとの利用者数を集計した結果、特養、老健、療養病床など重度の高齢者の多い施設では、“くつ・シューズ”が多く、“スリッパ・サンダル”は歩行可能な高齢者の多いGHやその他“有料、ケアハウス、宅老所”に比較的にみられるなど、施設種別による違いも確認されたが、全体的な傾向としては、いずれの施設種別においても“くつ・シューズ”全体で約8割と多く、次いで“スリッパ・サンダル”が約1割、“靴下・素足”で過ごす施設は、8%と少数という実態を把握した。

6) 平均要介護度と「はきもの」の選択について相関を調べた結果、“くつ・シューズ”については、施設の平均要介護度が高くなると“くつ・シューズ”を選択する割合が増加すること、“スリッパ・サンダル”については、平均要介護度が高くなると“スリッパ・サンダル”を選択する割合が低下するが、“靴下・素足”と平均要介護度についてはほとんど相関がなく、自宅に近い“素足・靴下”での過ごし方には、重度高齢者の寝たきりに近い状況を除くと、要介護度に影響されるよりもむしろ、建築特性に起因することを、データに基づき示した。

#### 【謝辞】

本研究は、平成18年度厚生労働省老人保健健康増進等事業費補助金「未来志向研究プロジェクト」の助成により行われた研究の一部である。本調査の実施に当たりご協力頂いた関係者の方々に対し、心よりお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- 1) 井上由起子, 他4名: 住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究 (その1) — 高齢者居住施設における入居者の個人的領域形成に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 No.501 pp.109-116 1997年
- 2) 石井敏, 他2名: 痴呆性老人の環境構築に関する研究 — グループホームにおける痴呆性老人の空間利用に関する考察 —, 日本建築学会計画系論文集 No.502 pp.103-110 1997年
- 3) 大塚崇雄, 他4名: 特別養護老人ホームにおける車いす使用者の車いす操作・車いす座位の向上と生活展開 — 車いす使用高齢者の周辺環境のあり方に関する研究 その1 —, 日本建築学会計画系論文集 NO.569 pp.47-54 2003年7月
- 4) 大塚崇雄, 他4名: 移動・移乗能力と痴呆度からみた車いす使用高齢者の生活展開 — 車いす使用高齢者の周辺環境のあり方に関する研究 その2 —, 日本建築学会計画系論文集 NO.576 pp.9-16 2004年2月
- 5) 齋藤芳徳, 他1名: 特別養護老人ホームにおける車いす使用者の生活展開に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 NO.529 pp.155-161 2000年3月 [a]
- 6) 齋藤芳徳, 他1名: 高齢者居住施設における車いす使用者の移動の実態に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 NO.531 pp.125-132 2000年5月 [b]



- 7) 齋藤芳徳, 他1名: 高齢者居住施設における車イス使用者の移動能力と生活展開に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 NO.532 pp.149-155 2000年6月 [c]
- 8) 齋藤芳徳, 他1名: 老人保健施設における車イス使用者の移動能力の向上と生活展開への影響に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 NO.538 pp.93-99 2000年12月 [d]
- 9) 社団法人全国老人保健施設協会: 身体拘束ゼロシンポジウム, 『老健』 Vol.12 NO.3 平成13年6月
- 10) 橘弘志, 他2名: 特別養護老人ホーム入居者の施設空間に展開する生活行動の場 - 個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その1 -, 日本建築学会計画系論文集 No.512 pp.115-122 1997年
- 11) 外山義: グループホームの可能性, 日本建築学会編, 建築雑誌2000年10月号 pp14-17
- 12) 三浦研, 他1名: 高齢者施設のユニバーサルデザイン, 老年精神医学雑誌, vol12, pp991-998, 2001年9月
- 13) 三浦研, 他1名: 高齢者施設における「衣」と「はきもの」その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2002年E-1分冊, pp307-308
- 14) 三浦研, 他1名: 高齢者施設における「衣」と「はきもの」その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2002年E-1分冊, pp309-310
- 15) 三浦研: 「はきもの」から考える高齢者施設, 病院建築 143号, pp14-15, 社団法人日本医療福祉建築協会, 2004年4月
- 16) 三浦研: 施設を住まいに近づけるハードの工夫, 『月刊介護保険』(法研) No.122, pp18-19, 2006年4月
- 17) 三浦研: 転倒が引き起こす弊害と足元づくりの重要性, 『おはよう21』(中央法規出版), 第18巻第7号(通巻第209号), pp14-18, 2007年6月
- 18) 三浦研: 第2章 地域の現状を把握するためのアンケート調査 “直鞍“地区高齢者施設の「自立支援」「食」「排泄」からみた実態把握調査, 医療法人笠松会有吉病院編 厚生労働省平成18年度未来志向研究プロジェクト報告書 pp.49-67 2007年3月
- 19) 巖爽, 他4名: グループホームにおける空間利用の時系列的变化に関する考察 - 「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究 (その1), 日本建築学会計画系論文集 NO.523 pp.155-162 1999年9月

## 要介護度および施設種別からみた歩行・移動に関する実態とその環境整備に関する基礎的研究 - 同一地域におけるアンケート調査から -

三浦 研、川越 雅弘、孔 相権

要旨: 要介護度および施設種別からみた歩行・移動に関する実態把握とその環境整備上の課題を明らかにするため、同一地域の高齢者施設にアンケート調査を実施した。本研究の結論は以下の通りである。1) 歩行器の使用には施設面積の大小が関係していることを指摘した。2) 車いすの使用実態から“自走・移乗ともに介助”が全体の約半数を占め、車いすが自助具としての使用よりも職員が高齢者を“運ぶ”ために使われている実態を把握した。3) 歩行者の割合が相対的に多いGHにおいて、車いす使用者の約3割、またその他と区分した有料、ケアハウス、宅老所の約半数で、“転倒や骨折を心配した車いす利用者の数”が把握されたことから、衝撃を吸収しやすい床材の導入など、骨折しにくい環境整備が過度の車いす使用を改善するうえで重要性を指摘した。4) 平均要介護度と「はきもの」の選択について相関を調べた結果、“くつ・シューズ”については、施設の平均要介護度が高くなると“くつ・シューズ”を選択する割合が増加すること、“スリッパ・サンダル”については、平均要介護度が高くなると“スリッパ・サンダル”を選択する割合が低下するが、“靴下・素足”と平均要介護度についてはほとんど相関がなく、自宅に近い“素足・靴下”での過ごし方には、重度高齢者の寝たきりに近い状況を除くと、要介護度に影響されるよりもむしろ、建築特性に起因することを、データに基づき示した。